



第1分科会

第8分散会

I はじめに

最初に、報告協力者(団)より討議の柱について提案を行った。報告・資料集 P.60～61「第1分科会討議課題」より、①・②・③を中心に討議を進めていくことを確認し、報告・討論に入った。

II 報告および質疑討議の概要(1日目)

—報告1—③

部落問題学習と私 (宮崎県同教)

—主な質疑と意見—

長野 報告者自身にとっての教員になる前、後の部落との出会いは？報告の中で授業を構想しながら生徒の実態の把握の大事さを言われているが、そこで明らかになってきた子どもたちを取り巻く差別の実態とは何か？そしてそこからどのように授業を展開してきたのか？

大阪 大阪市で教員をしているが、実は日向中の卒業生。嬉しく報告を聞いた。自分が在籍していた当時からの類推だが、子どもたちは部落にルーツがあってもわかっていない状況があったのではないかと？現在の子どもの実態はどうか？子どもだけでなく同僚に対しても踏み込むのは勇気がいるのではないかと？その辺のことを教えて欲しい。

報告者 教員になる前は(出会いは)全くなかった。教員になってからも加配教員になってから地区の方の話を聞く機会を得た。地区の支部長さんや解放同盟の方とお話をすることがあった。その中で差別の厳しさを知り、人権・同和教育を進めていく土台になったかと思う。子どもたちを取り巻く実態については、現任校の前の子どもの話になるが、仲がよい子たちだが、部落差別に対する認識はあまりない様子だった。周囲の先生方には人権教育を学級経営の柱にしてほしいと、話している。教科では社会科の全単元でのワークシート作成などを通して関わった。多少の発信と刺激になってのではないかと思う。

神奈川 授業をしたクラスの中に、部落の子など被差別の立場の子どもがいたのではないかと？授業をする上での核となる子はいたのか？その子がどんな学習をしてどのように変わっていったのか？教えていただきたい。

福岡 配置校ということは、校区に地区があるのではないかと思う。中心に据えた子の学習の姿や変

容について教えていただきたい。もう一つ、中学校区の中でどのように広め、連携をしているか？

報告者 被差別の立場の子がいたかどうかの情報はなかった。どうゆう立場の子どもや親がいても伝わるように授業をしてきたつもり。したがって被差別の立場の子の変容については答える事ができない。どのように広げたかについては、ガイドラインという形で日向市内の全小学校に配布した。市内の全職員が共有できるフォルダで見ることが出来る。中学校のガイドラインも作成し共有している。ガイドラインを使った授業公開もしている。被差別の子どもの存在はわからなかったが、子どもたちとの関わりを通して落ち着きのなかった子どもが社会の学習に取り組んでくれるようになった。

三重 討議課題の③について。報告者の部落差別はあってはならないという思いに共感する。報告者自身は部落差別の現実をどう捉え、変容していったのか？

報告者 加配教員になる前は知識として理解していた。小学生の時に受けた学習の熱さは残っていた。加配教員になってからは解放同盟の方などのお話を聞いてきた。ネットの差別など大きく変化している。時代の変化に対応した部落問題学習をしていかなければならないと思っている。

新潟 解放同盟に所属している。宮崎県ほど進んでいない現状はあるが、解放同盟との関わりや部落問題学習をしっかりと進めているところは素晴らしく、学ぶことがある。しかし、やはり子どもたちを取り巻く差別の現状にもっともっと関わることで見えてくるものがあるのではないかと？新潟のことを話すと、鳥取ループ関連で激しく晒されている。宮崎でもそうなのではないかと？個々の部落の子たちとの関わりは当然出てくるのではないかと？部落の子たちとどう関わっているのか、もっと聞きたかった。

報告者 鳥取ループについては、警戒はしていたが、楽観的にとらえていたかもしれない。日向市の加配教員は4名。他の地区には子ども会があるが縮小傾向にある。

神奈川 ガイドライン作成の大切さは理解できる。自分の勤務校(横浜市)の学区には食肉市場があるがそのことを職員が知らない現実がある。食肉市場のことを社会科の中で位置付け、部落問題学習としても6年生につなげるガイドラインを作成している。報告者のガイドラインに抜けていると感じる事がある。それは一人の子どもに対してその子はという子でどのようになっていったかというふりかえりができていないのでは、子どもにかえていかならないのではないかと思う。私たちが行う人権学習がどのように子どもに届いていて、また届いていないのか、しっかりと受け止める必要がある。授業づくりの中に子どもの顔が見える報告をしてほしい。

三重 討議の柱③について。その子の生活実態や背景と学習の関連性が見えない。

報告者 子どもの姿がみえない報告ではあったが、

全ての子どもに届くように実践をしてきたつもり。子どもたちにどう届いていたのかということについては、社会科で毎回ワークシートを使い生徒の言葉から把握した。児童理解の姿勢を大事にして、やんちゃな子どもたちとも接してきた。若い先生方に対しては、ガイドラインを作って人権同和教育を行う姿勢を伝えてきた。

三重 間違った知識で差別者を育ててはいけないと思う。社会科の中での実践は評価できる。それ以上に子どもに何を伝えるのか？部落問題学習の中は、部落史を学ぶことだけではない。自分が抱えていることを真剣に向き合うことで解放されていく。部落問題学習が自分の問題になるような学習としていくことが大事だと思う。

新潟 後ろ向きになりがちな教員の中で、ガイドラインを作成されたことはありがたいと思う。高等学校に勤務している。県の副読本もある。教材も大事だが、なぜ同和教育をするのかということ子どもたちに伝えていくべきだと感じている。人権学習が何かあったら来て欲しいと伝えるきっかけにならないかと思っている。

() 子どもの姿が出てくる実践で話をしていきたい。部落問題学習を部落の子がいる中での実践の話をしたい。人権学習をきっかけに、自分が部落の出身だということの名乗りたいという生徒と1年かけてきて名乗りの言葉を一緒に考えてきた。全校集会の中で自分のことを名乗った。その子自身が自分をどう受け止めるかということ語った。学習をしてそのことをどう受け止めるかは、その子によって全然違う。そこからが部落問題学習のスタートだ。部落の子とであってほしい、関わり続けて欲しい。

—報告2—⑦

「思い」をつないで (新潟県同教)

—主な質疑と意見—

京都 鳥取ループの件。ご自身の教え子さんの話、卒業後に差別と出会うことがある。差別に向き合う力を付けるために学校として何をすべきだと思うか？

新潟 以前であった教え子との話。部落のことを話さないでその子と付き合っていくのは難しいと思った。Aさんに部落の話をした時、どんな気持ちだったのか？

香川 現在関わっている生徒の話。報告と重なった。Aさんに関わるということについて、周りの教師や生徒とどうつなげていこうと思っているのか？

報告者 鳥取ループのことは人から聞いて知った。周囲の先生方とすぐに共有し、間違った知識に出会ってしまわないか生徒の様子を見ていくこと、削除要請の対応をした。Aさんと部落の話をした時のことは、Aの父との話の後、Aさんにどう話すのか悩んだ。報告の作成に関して父やAさんと話した。父とAさんが話をしていることを知らずに話したこともあって最初はドキドキしていた。Aや父の

話をもっと聞きたいと思った。Aさんの別室登校の様子などはケース会議の内容を職員で共有している。Aさんの思いを聞きながらステップをふんで取り組んでいる。

大阪 自分が出会ってきた人たちを思い出しながら報告を聞いた。Aの思いを受けてどんな授業展開を考えているか？差別する側の問題として、Aと共にいっていきみんなの学習としてどのように取り組んでいるか？

三重 地区にルーツのある子を担任している。将来、差別にどう立ち向かっていくか？という学習を大事にしている。報告者はAさんにどんな力を付けていきたいと考えているのか？

香川 外国にルーツのある子、施設で生活している子と出会ってきた。現在は地区の担当をしている。地域の方から「地区の人だから関わっているんやろ？」と言われた。言葉につまった。それでも僕は関わりたいと思う。報告者はどう思っているか？

報告者 これまでは知識の学習をすればと思っていたが、Aさん(家族)と話をする中で差別があるから学ばないといけない、はちょっと違うと思うようになった。Aや父の思いを改めて聞いていきたいと思った。差別に立ち向かってきた人たちの姿を伝える部落問題学習を考えていきたい。Aさんには、何かあっても一人で抱え込むことなく自分で思いを伝える力を付けたい。関わり続ける理由について、最初は家庭訪問うまくできなかったが、関わるうちにAの父が「関わってくれてありがたい」と話してくれ、話ができる関係になっていった。「来るな」と言われても関わり続けたいと思っている。

大阪 Aさんと学ぶ子どもたちが学校で反差別の力を付けるため、どのような部落問題学習や仲間づくりを進めているのか？

神奈川 報告者がAさん家族をどのように見ているのか？差別があることを自覚していても、災害後に仮住まいから元の家に戻りたいという父の思いに何を感じるか？解放運動はしていないが、父は差別と闘っているのはないか？その姿にこそAさんが学ぶべきことがあるのではないか？Aの母に寄り添い生きる人たちの姿など、見方を変えていく必要があるのではないか。

新潟 報告者と一緒に水害のボランティアに参加した。新潟の水害はとても深刻だった。中でも被差別部落への被害が大きかった。50年に1度位の割合で大規模な水害が起きていて、その度に部落の家々が水没するという、社会構造的に起きている。人権各種団体が片付けを行なった。ダンプカーが入らないなど厳しい現状や他にもトラブルが常にあった。報告者に「加配教員としてこれからもずっと関わり続けてほしい。」と言った。報告者の「はい、わかりました。」というはつらつとした返事を今でも覚えている。地区の様子や道路の現状など厳しい生活の現実がある。これを変えていかなければならないと思っている。Aさんにもつながり続けてほしいと思う。

新潟 差別された話を聞きに行くうちは何も話してくれなかった。何度も話をきいてもらっているうちに「この家族のことをもっと聞きたいな」と思った時に、話してくれるようになった。そこで差別の現実を知り、差別を吹き飛ばす姿も見てきた。差別と闘うということを学んだ。報告者と共に頑張っていきたい。

報告者 Aの父ともしっかり話をし、学びたいと思った。Aの父や祖父の姿に学ぶことやAが自分のルーツを知りたいと思って父と話したことも知り、今後も話を続けていきたい。反差別の仲間づくりについては、勤務校での全校での学習を担当している。ここでは、何でも言い合える関係づくりについて取り組んでいる。

Ⅲ 総括討論(1日目)

奈良 部落史の研究をしている。近年、部落の起源は中世あたりから出てくる。しかし、今だに土農工商の認識の教員がいて残念に思うことがあった。教える側が歴史の情報を見直し、更新する必要がある。

新潟 部落の子どもたちとの関わりがある報告として報告者を推薦した。新潟県の解放運動の現状の中での取組であり、報告者と応援や連携をしながら、部落の子どもたちとしっかり関わろうとされた。加配教員が部落の子どもと向き合い、関わる実践として、大きな一歩となった。鳥取ループの晒し差別の被害もあるなど、厳しい差別の現実がある。新潟県の実践を今後も支え、取組みを続けていきたい。

長野 被差別部落の出身。水害の被害にあったことがある。小学校の頃から解放子ども会で学んできた。知識については学んできたが、気持ちの中でスッキリしないものをずっと抱えながら教員をしていた。以前に参加した全同教で、あなたにとって部落とは何ですか？と問われた。自分にとっては父と母だった。結婚差別を受ける中で家族を作ってきた父の姿や思いに気づいてきた。父や母の生き様その全てが部落差別との闘いだったと気づいた時にすごくスッキリした。子ども会や学校教育で得たものがたくさんあった。しかし、父や母の生き様そのものが私にとっての部落であり、そのことに気づけたことが私の豊かさである。報告者の報告を聞いて、「かわり」という言葉が出たが、それは「知りたい」ではないかと思った。Aさんの父や祖父の生き方を知っていく中で、報告者自身が豊かになっていくのではないかと思う。正しい知識はもちろん大切だが、自分にとって一番身近な人たちの中から、自分にとっての部落に結びつけてほしい。

鳥取 以前に参加した全同教で「差別は一人の時に会おう」という言葉にドキッとしたことがある。これまで学習会の中で差別と闘うこと学んできた。しかし、自分が結婚差別を受けた時、まず浮かんだのは自分の母親の顔、次に浮かんだのは一緒に頑張っ

てきた友達の顔だった。母親には相談できなかった。当時の彼女とは離れていったが、ずっと負けたと感じていた。その時に、隣保館で知り合った方と話す中で、それは負けたのではなくて、しなやかに生きればいいのだからと言ってもらえた。今思うのは、差別者をつくらない、差別に負けそうになった時に、それに負けない自分をつくってほしいということ。一人になった時にどう行動できるのか、そんなことを考えながら授業をしている。

三重 勤務校では教師の生き方宣言をして、自分がどのように生きていか語り合っている。親の願いを本人が聞くことが大事だと思っている。本人の力になる。部落差別に立ち向かっていく力になる。

(京都?) 京都の新興住宅に育って、部落差別を知らずに育ってきた。しかし、自分の母が亡くなる前に部落出身であることを明かしてくれた。全人教に参加して、他の方の発言を聞いて自分も語っていかないとけないと感じた。

報告者(新潟) いい学びになった。家族の姿に学ぶという視点がこれまでの自分にはなかった。家族の思いをもっともって聞いて、家族から学ぶという視点を得られたのが大きかった。帰って、もっと話してみたい。部落問題学習に出会ったことに感謝したい。自分の祖父、祖母のことを思い出した。自分自身の父の思いを知り、自分の生き方について考えていきたい。

Ⅳ 1日目のまとめ

協力者 1本目の宮崎県からの報告では、報告者自身が小学生の時の同和教育の中で担任の先生から受け止めた思いを「熱量」という言葉で表現している。学習を通して得た熱量がさらなる学び、実践の出発点となること、学校教育の中で子どもたちが人権・同和教育に学び、反差別の力を育てていくことの大切さが確認できた。質疑・討議では、学習を通してこの熱量をどのように子どもたち自身や他の教員に根付かせていくかということが議論された。学習を通して被差別の立場の子が、そしてそこにいる全ての子が学習したことをどう受け止めて、自分の生き方を問い直し、解放されることで反差別の力を付けていくか。学習した事が熱量として心に届くことが次の学習のスタートとなり、それをつなげていくことが大事である。2本目の新潟県の報告は、報告者自身が自分にとっての部落とは何か？と問い続けられている報告。報告者にとって部落とは「どこか遠いところ」だった。しかし、Aさんとそのご家族との出会い、関わりの中で「かわっているつもりだった」自分に気づき、「もっと話を聞きたい」「かわりたい」という思いへと変容していった。さらに、報告者自身の生き方にも向き合っていく。差別に加担している自分に気づき、自身のありようを問い直す報告からは、「差別の現実から深く学ぶ」という姿勢を学ぶ事ができる。本当の思いを知ることが学びになること、関わり続けること

が自分を問い続けるということを学んだ。寄り添い、受け止める、その時に何をみるべきなのか？参加者の発言にあったように、やはり私たちが見なければならぬのは、差別の厳しい現実があるということ。その厳しい現実私たちがどう向き合っているか、子どもたちと共に学ぶか、私たち自身も変わりながら実践を創り上げていくかということの大事さを学んだ。厳しい差別の現実をみているか、みようとしているかということは、私自身の中でも非常に大きな課題だと感じながら報告や皆さんの発言を聞かせていただいた。総括討論の中で、フロアのみなさんがご自身のことを語られる話を聞きながら、私自身のことも考える時間となった。若い時に父からもらった手紙とその後父のことを知ることができないまま別れたこと。現在の勤務校での生徒たちとのこと。今日の報告と討論で元気をいただいた。今日の報告や討論されたことが、2日目の討論にもつながっていくと思う。

V 報告および質疑討議の概要(2日目)

報告協力者より1日目の報告と討議について簡単に概要を話し、2日目の報告・討議に入った。

—報告3—㊸

目の前の子どもを見つめて (香川県同教)

—主な質疑と意見—

大阪 「性はゆれる。」ところが難しい。親への理解が難しい。生徒本人と関わる中で保護者にどう関わり、関係をつくってきたか？

三重 小学校から中学校へ、そして中学校から高校への引き継ぎはどのようにしたのか？また、報告の中で制服登校を「認可」という表現があったが、「選択」ではなく学校が決めているのか？

三重 体操服や制服での登校についての様子は？ひなたさんの保護者に体操服、制服の話の時に何があったのか？

大阪 生徒の思いから教職員への学びとその広がりによって圧倒される思い。その過程での様子や保護者とのやり取りについて知りたい。また、そらさんのその後について知りたい。

報告者 そらさん自身は、保護者に絶対に言ってほしくないという思いがあった。それでいいのか悩んだが、いつか自分の口で言うからという本人の気持ちを尊重した。高校に進学したそらさんについては、新しい環境に周囲に理解してもらえないしんどさがあるようだった。高校の担任と話をした。今は元気に頑張っていると聞いている。小学校ではそらさん本人は自覚していないようだった。もしかしたらという引き継ぎがあった。ひなたさんについては、小学校からの(ジェンダーに関する)情報はなかった。人間関係などのジェンダー以外の悩みがあり、本人や保護者と連絡を取り合いつながってきた。その後、本人の許可のもと性の悩みについて保護者と共有した。母親は気づいている様子だったが父親の受け止めが心配で伝えなかった。高校には生活面での話をしたが、性に関しては伝え

ていない。卒業後も関わりを切らないように関わっている。「認可」という言葉については、制服について子どもたちからの訴えがあった時にはいて話を聞いて、その上で学校として動くようにしてきた。周囲の教職員の反応は、研修を始めた頃は「わがまま」「ただきついででは？」「女子特有の～」というような受け止め方があった。研修を進めている中でも「研修はありがたい、でも自分の子どもやったら…」という発言もあった。しかし、研修は続けたいと思っている。

福岡 当事者の保護者だけでなく、その他の保護者への啓発などの取組はあったか？また、中学校での取組を小学校には伝えるなどの動きはあったか？

大阪 集団づくり、仲間づくりの視点で、もともとひなたさんやそらさんを受け入れる素地があったのか？学習を通してなのか？

大阪 教職員の意識の課題をどのように共有しているか？担任の先生だけでなく、他の生徒たちとのつながりは？どのような関係をつくっていったか？

神奈川 教師だけでなく生徒の中にも「女子やから～」という考えがあるのではないか？生徒間のつながりはどうだったのか？またどうつながりをつくったのか？

大阪 学校が変わることで社会を変えていく主体者が育つ。きっと当事者の子たちは学習の中で気にしているのは周囲の生徒の学び姿なのではないか？共に学んでいる周囲の子の学びの様子を知りたい。

報告者 保護者への啓発については、学校通信等で学びの様子を発信した。また、講演会への参加呼びかけをした。小学校との連携については、市内で小中合同研修会をして情報交換と共有をしている。年2回の「人権月間」のなかでLGBTQの課題について学習した。「リアルな場面になると、差別をしない自分でいられるか不安」という子どもの意見があったが、きれいごとにと終わらずお互いに考える機会となった。学んだ後にも性の多様性に対する否定的な発言もあったが、「学習が生かされてないのでは？」というアンテナをはる子どもも増えている。ひなたさんを中心とした仲間づくりについては、他の子どもたちも受け入れる雰囲気があった。学級では、ひなたさんの得意な絵を生かして、よさを通して周囲とつないだ。他には、子どもの考えを交流したり、自己開示や問い返す取組など自分の思いを伝え、差別心と向き合う取組を進めながら集団づくりをしてきた。

熊本 自分自身の性のゆれがあることを思い出した。勤務校にも報告の中と同様の悩みを持っている生徒がいる。制服に悩む生徒を理解する職員集団づくりに悩んでいる。「認める」という言い方をしてしまう。教職員が生徒との信頼関係をつくるためにどのような意識をしているか？さらにどのように理解し、具体的な変容につなげてきたのか？

報告者 まずはしっかりと聞くことからだと思う。最初は何も話してくれなかった。生徒の苦しみを分かろうと自分なりに学んで、自分自身の中の「わがままなのでは？」という気持ちが変わってから、少しずつ話してくれたと思っている。ひなたさんとの中でもとことん聞くことを大事にしてきた。まず自分が生徒のことを知って、好きになろうという気持ちで接した。制服については、強引に進めたりもめたりしたわけではない。研修をすることへの抵抗感を感じることもあったが、続けることを大事に取り組んだ。スムーズではなかったが、制服業者や生徒指導担当、管理職、教育委員会と少しずつ広がっていった。

岡山 性の多様性についての授業づくりの中で、当事者の言葉を聞いた。「授業をすると確実に傷つく、でもそれを取り戻せるような授業をしてほしい。まずは、全ての人が多様な性の一員であるということに気づける授業をしてほしい。」当事者、非当事者ではなく、すべての人が多様性の中の一員であるという視点を大事にすることで、差別する、受け入れるという線を引かずに、仲間づくりの視点で変わってくるのかと思った。

三重 当事者、非当事者という分ける考え方ではなく SOGI という考え方、グラデーション、性に対する違和、表現の仕方が変わる。アライ、ロールモデルとの出会いが力になるのではないかな？

香川 自分はバイセクシャル。自分はいじめられた。「それを出してはいけない」と担任に言われた。わかってくれないことへのあきらめもある。親や妻にもカミングアウトするつもりはない。自分のアイデンティティとして受け入れつつある。社会全体の変化も感じるが、「多様性といえば…」という言葉や聞きとまだまだの部分もあると思っている。自分が当事者として、当事者生徒にどう関わるか？という悩みもある。宿泊を伴う行事の対応などもっと知りたいと思った。

香川 小学校。本校でも出会いの場を作りたい。年に2回 LGBTQ の方々との座談会があり、正しく理解したいとの思いから参加した。自分は知ったつもりだった。参加を通して自分の偏見、思い込みを痛感した。知ることや学びがなければ間違った認識で授業をしていたかもしれない。「理解できない。」という参加者もいた。そのような意見も含めてどのように伝えたらよいかと考えた。他人事になりがちだが、人と人との出会いを通して変わっていくのではないかなと思った。

—報告4—③

「みんなとできてうれしい」 (大阪府人連)

—主な質疑と意見—

三重 A の保護者について。制服のことを伝えた時の様子や反応は？制服は尊重するがバレエを辞める時の母の号泣など A の保護者の変容について知りたい。

熊本 保護者の変化について、どう変わったか？ク

ラシックバレエに対する思いなど。

報告者 A の保護者に伝えた時の反応は、制服のことは何となくわかっている様子だった。本人の思春期の揺れという考えもあった様子だった。バレエの時は、聞いた話だが、いざ辞めるとなった時には本人の悩みを受け入れきれない母の葛藤などがあったかもしれない。幼少期から A のバレエをずっと支えてきた母の思いがあっただろう。コロナ禍での zoom での面談の際に、A に対して「彼女」と表現したことに対して、横にいた A が不快感を示したことに対して母がそのことを報告者に伝える場面があった。

大阪 2年時の A の担任。クラシックバレエの件は、本当に悩みに悩んでいた。プロを目指して目標高く取り組んでいた。予定のステージもあり、母も教室の都合や他への迷惑などを考えていた。自分も同席して A の思いを母が聞いた。本人の悩みから不安定になっていた時期だった。性の悩みも含めた本人の本当の思いを母が知る機会となった。

三重 C への関わりはどうだったのか？本人の性の自認などどの程度進んだのか？保体の共修など、変えていく中での壁はなかったのか？反発などはなかったのか？そこに闘いはあったのか？

報告者 C への関わりは、性については A ほどははっきりしていなかった。体の成長の悩みがあったため、保護者とも話した。卒業式の時に C がスカートは履くがセーラー服が嫌という申し出に、「ええやん」と本人の希望を尊重することがあった。保体の共修については、自分が担当ということもあり進めた。性の多様性の課題と自分が女子生徒と関わり関係を作っていきたいという考えから共修に変えていった。教科中心に進めた。評価に関しては体の性を中心に進めたが、生徒からの悩みや希望を聞きながら進めた。

神奈川 学校、社会全体が男女で分けることが多い。教科や座席など無意識のうちに分けている。気づくことで変えていくことができることを報告からも感じた。共修のあり方について考えた。男女差ではなく、一人一人を大事することが学校では大事。委員会活動での「男女一人ずつ」の学校文化もある。他にも見直したものはあるか？

報告者 座席表などのその後の変化については、自分が異動してしまい、わからない。学年ごとで性の多様性に対する意識については温度差があった。賛同はするが、意識としては課題があったように感じる。体育祭では教科担当として性別を問わない競技を提案したこともあった。その他、テストの素点の確認作業の際の性別表記をなくした。生徒も気づいて喜んでた。

埼玉 学校としてのチームワークのよさを感じた。教職員集団のあたたかい雰囲気を感じた。学校全体を変えるため、職員に理解を広げるために生まれる「あたたかい」はなかったのか？

大阪 昨年小学4年生担任。席決めで男女市松であった。なぜ？決めつけが男女を分けていると感

じる。分けない指導で学ぶことがあった。小学校から中学校へどうつないでいくかが大事。男女の表記など変えていこうと闘っていくが、自分がきつくなることがある。報告に元気をもらった。

報告者 学校の中で闘ったかと言われると、闘ってはいない。周囲の理解もあったと思う。自分が話してもわかってもらえると感じていた。今、異動してから、課題を感じることもあるが校長や他の先生と話しながら、少しずつ学校を変える取組を進めている。

熊本 自分の学校にも性に対する悩みを抱えている子がいる。制服の対応で職員はもめるだろうと思っている。職員の意識の課題を感じている。自分の子どもに付けた名前でも悩むことがあった。教育の場で教師が変わっていくことの大切さを感じた。儀式的行事などで制服を着なければならないという感覚など、これでいいのか？と疑問をもった。

愛媛 中学校で校長をしている。LGBTQの課題を抱えている子どももいる。男女混合名簿や制服変更など、PTAとも連携して取り組んできた。自分自身ももっと学びたいと思いこの分散会に参加した。入学式の際、新旧の制服が見られる中、マスクミがストラックスを着用している生徒の気持ちを聞きたいと言ってきた。誰に対しても制服の選択ができる目的であるからそれはできないと対応した。今後もさらに取り組んでいきたい。HP等も見たい。

大阪 目の前の子どもたちの姿が出発点であるべき。Aの制服の件もそうだった。「闘う」ということについて。いろいろと校内でぶつかり議論し、悩みながらのこともあった。それでも(Aなど)当事者の話を聞いて、職員集団が理解した上で同じ方向を向いてたたかっていたと思う。対立ではなく共闘という職員集団だったと思う。

VI 総括討論(2日目)

岡山 良い実践だった。私たちが変わらなければならない。倉敷市では人権教育について学びを進めている。PTAの研修会なども行った。10年以上前から男女混合名簿を進めてきた。その後、制服の男女規定、更衣室、男女共修など取組を進めた。水泳の授業など、男女別の学習の際には子どもの話を聞きながら進めた。幼・小・中での研修を行い、取組を市全体で行うことで教職員の意識向上につながった。

三重 部落差別とLGBTQの問題、まだまだ世の中が変わっていかなければならない。社会に出た時につきつけられる。その時にどう乗り越えていく力を付けるか？と思いながら実践している。将来、しんどいことに出会った時に命を守るために、どう乗り越えていくか？一人一人の課題に向き合い、相談する、逃げる、立ち向かう力を付けていきたい。反差別の力を付けていくために、自分自身ももっと人権課題について知り、学んでいきたい。

() 柱①について考えた。LGBTQの報告にある部落問題を感じた。Aと母やそらさんとひなたさん。しんどい思いをする子どもたちの存在があった。声を上げる子、関わる先生やよりそう人がいること。声さえも上げることができずにしんどさを抱えている子がいるのではないかと部差別の根っこと同じ。誰が頑張るのか？いつまで頑張らなければならないのか？本当は誰が当事者なのか？自分は当事者ではないと思わされている特権が自分自身にあったのではないかと考えさせられた。差別をなくすための教育の創造とは？一人一人が抱えているものがちがう中で、一人一人が聞くことが大事だが、いつまで聞き続けるのか？自分から自分のことを語っているか？信頼関係をつくるためには「求める」のではなく「ひらく」必要があるのではないかと反差別の教育のために自分はそこをはずしたくない。いつまでも当事者の方を前に立たせたくない。

大阪 大人の集団づくりの大切さを感じた。報告の中で「理解はしたけど、じぶんやったら嫌やわあ。」という部分にひっかかった。そんな大人たちが当事者生徒にどうかかわれるのだろうか？自分のこととして捉えられるのか？と感じた。「たたかう」ことについて、当事者の生徒たちはいつも孤独でたたかっているのではないかと子どもが嫌な思いをするのか？教師が嫌な思いをするのか？自分もまだ悩んでいる。人権担当をしながら一緒にたたかう仲間になっていきたい。

福岡 2日間参加して、自分の校区のことを考えた。不必要な男女分けをやめた。大人がこれまで生きてきた中でつくってきたバイアスにこだわる、やってみるとうまくいくこともあった。取り組む中で、子どもたちの意見を聞くことの大切さを感じた。自分が思う以上に子どもたちの理解が深いことを知った。子ども同士が理解しあって生きているのだと感じた。集団づくりの大切さを感じながら実践をしている。

大阪 どうしてカミングアウトをしなければサポートを受けられないのか？人権担当としてそんな必要のない制服を目指した。地域の賛同も得ることができている。仲間を増やしていくことができている。今は生徒手帳の文言なども検討している。周りの先生たちが議論をしている。

佐賀 佐賀県の取組。数年前から名簿から性別をはずしている。制服は必要なのか？という議論があった。着ても着なくてもいい制服に変更を進めている学校がある。県内に広がってほしい。自分は「マイノリティ」という言葉を使わないようにした。多くの子どもが自分はマジョリティという感覚がある。その立場から考える生徒が多いのではないかと「自分とはちがう」という価値観で「自分たちとはちがう」にならないようにと考えていきたい。

熊本 阿蘇の出身。ある学校で、なぜ女子制服がスカートなのか？経緯を調べた先生がいた。その話によると、そもそも男女が男性側の制服に合わせ

る実態があった。しかし、「女性らしさ」を獲得するために変わっていったという話だった。当時は女性らしさをみとめることが人権を認めるという時代だった。現在は、現在の制服にまつわる地域の実態がある。「少数者のせいで」変えていくのはなく、今の実態の中で権利を守るためにどうするのか、考えていく必要がある。

報告者(宮崎) いろいろと会場からご指摘をいただいた。それらを持ち帰って今後も考えていきたい。

報告者(香川) 生きづらさだけでなく、差別は命に関わる。差別をする側の問題として考えていく必要がある。私自身の闘い方はまだまだ甘い、ここをスタートに頑張りたい。

報告者(香川) 二日間を通して人や実践との出会いを実感している。報告の中の生徒たちとの出会いと一緒に考えてきた先生たち、全人教参加者の熱をもった発言。経験と感動があった。変わっていく自分を子どもたちにかえしていきたい。

報告者(大阪) 悩みを抱えさせているのは誰か、学校や社会、マジョリティではないかと思った。子どもたちが安心して過ごせるために、気づいて変えることが大事だと思った。たくさんの人たちと安心できる学校をつくっていきたい。

Ⅶ 2日のまとめ

協力者 4つの報告と討論を通して学んできた。差別が見えにくくなってきたとよく言われる。しかし、ネット上の差別事件などの新たな差別事象や人権課題がある。2日間を通して改めて学んだことは、やはり差別の現実深く学ぶこと、知ることから始まり、逃げずに見ようとすること、向き合うこと、自分の有り様を問うということ。しんどさを抱える子どもの思いを知り、関わり続けること。学校や社会を変えていくことも重要な課題である。それぞれの立場の中で反差別の力をどう付けていくのか？考えさせられる二日間であった。同僚、家族、仲間をつくって、被差別の人が闘いつづけることがない学校、社会を創っていかねばならない。私たちは被差別当事者という言い方をするが、ハンセン病にかかわる方のお話の中で、当事者とは誰か？差別をしてしまった人たちも当事者なのだという話があった。間違った情報に騙され、結果的に差別をしてしまった人たちも当事者なのだと話された。誰もが安心して幸せに過ごしていける社会をつくることの大切さ、そのために実践を続けていくことの大切さを、報告を通して学んだ。それぞれの地域での実態は違うと思うが、この2日間の学びを大切にして実践を続けていきたい。